

古放文

芥川龍之介

青空文庫

これは日比谷公園のベンチの下に落ちていた西洋紙に何枚かの文放古ふみほごである。わたしはこの文放古を拾った時、わたし自身のポケットから落ちたものとはばかり思っていた。が、後にのち出して見ると、誰か若い女へよこした、やはり誰か若い女の手紙だったことを発見した。わたしのこう云う文放古に好奇心を感じたのは勿論もちろんである。のみならず偶然目についた箇所は余人は知らずわたし自身には見逃しのならぬ一行いちぎょうだった。――

「芥川龍之介と来た日には大莫迦おおぼかだわ。」!

わたしはある批評家の云ったように、わたしの「作家的完成を棒にふるほど懷疑的かいぎてき」である。就なかんずく中わたし自身の愚には誰よりも一層懷疑的である。「芥川龍之介と来た日には大莫迦おおぼかだわ!」何と云うお転婆てんばらしい放言であろう。わたしは心頭に発した怒火を一生懸命に抑えながら、とにかく一応いちおうは彼女の論拠に点検を加えようと決心した。下にしも掲げるのはこの文放古を一字も改めずに写したものである。

「……あたしの生活の退屈たいくつさ加減はお話にも何にもならないくらいよ。何しろ九州の片か田舎たいなかでしよう。芝居はなし、展覧会はなし、(あなたは春陽会しゅんやうかいへいらしって? 入

らしつたら、今度知らせて頂戴。あたしは何だか去年よりもずっと好きそうな気がしているの。音楽会はなし、講演会はなし、どこへ行つて見るつてところもない始末なのよ。おまけにこの市の智識階級はやつと徳富蘆花程度なのね。きのうも女学校の時のお友達に会つたら、今時分やつと有島武郎を発見した話をするんじゃないの？ そりやあなた、情ないものよ。だからあたしも世間並みに、裁縫をしたり、割烹をやったり、妹の使うオルガンを弾いたり、一度読んだ本を読み返したり、家にばかりぼんやり暮らしているの。まああなたの言葉を借りればアンニユイそれ自身のような生活だわね。

「それだけならばまだ好いでしよう。そこへまた時々親戚などから結婚問題を持つて来るのよ。やれ県会議員の長男だとか、やれ鉾山持ちの甥だとか、写真ばかりももう十枚ばかり見たわ。そうそう、その中には東京に出ている中川の息子の写真もあつてよ。いつかあなたに教えてあげたでしょう。あのカフェの女給か何かと大学の中を歩いていた、——あいつも秀才で通っているのよ。好い加減人を莫迦にしているじゃないの？ だからあたしはそう云つてやるのよ。『あたしも結婚しないと云いません。けれども結婚する時には誰の評価を信頼するよりも先にあたし自身の評価を信頼します。その代りに将来の幸不幸はあたし一人責任を負いますから』つて。

「けれどももう来年になれば、弟も商大を卒業するし、妹も女学校の四年になるでしょう。それやこれやを考えて見ると、あたし一人結婚しないってことはどうもちよつとむずかしらしいの。東京じゃそんなことは何でもないのね。それをこの市じや理解もなしに、さも弟だの妹だのの結婚を邪魔じやまでもするために片づかずにいるように考えるんでしょう。そう云う悪わるくち口を云われるのはずいぶんあなた、たまらないものよ。

「そりやあたしはあなたのようにピアノを教えることも出来ないんだし、いずれは結婚するほかに仕かたのないことも知っているわ。けれどもどう云う男とでも結婚する訣わけには行かないじゃないの？ それをこの市じや何かと云うと、『理想の高い』せいにしてしまうのよ。『理想の高い』！ 理想って言葉にさえ気の毒だわね。この市じや夫の候補者のほかに理想って言葉を使わないんですもの。そのまた候補者の御立派ごりつぱなことつたら！ そりやあなたに見せたいくらいよ。ちよつと一例を挙げて見ましようか？ 県会議員の長男は銀行か何かへ出ているのよ。それが大のピュリタンなの。ピュリタンなのは好いけれども、お屠蘇とそも碌ろくに飲めない癖に、禁酒会の幹事をしているんですつて。もともと下戸げこに生まれたんなら、禁酒会へはいるのも可笑おかしいじゃないの？ それでも御当人は大真面目おおまじめに禁酒演説えんぜつなんぞをやっているんですつて。

「もつとも候補者は一人残らず低能児ばかりって訣でもないのよ。両親の一番気に入っている電燈会社の技師なんぞはとにかく教育のある青年らしいの。顔もちよつと見た所はクライスラアに似ているわね。この山本って人は感心に社会問題の研究をしているんです。けれど芸術だの哲学だのには全然興味のない人なのよ。おまけに道楽は大弓と浪花節とだつて云うんじゃないの？ それでもさすがに浪花節だけは好い趣味じゃないと思つていたんでしよう。あたしの前じや浪花節のなの字も云わずにすましていたの。ところがいつかあたしの蓄音機へガリ・クルチやカルソウをかけて聞かせたら、うっかり『虎丸はないんですか？』つてお里を露わしてしまったのよ。まだもつと可笑しいのはあたしの家の二階へ上ると、最勝寺の塔が見えるんでしよう。そのまた塔の霞の中に九輪だけ光らせているところは与謝野晶子でも歌いそうなものよ。それを山本って人の遊びに来た時に『山本さん。塔が見えるでしよう？』つて教えてやったら、『ああ、見えます。何メートルくらいありますかなあ』つて真面目に首をひねっているの。低能児じゃないつて云つたけれども、芸術的にはまあ低能児だわね。

「そう云う点のわかつているのは文雄つてあたしの従兄なのよ。これは永井荷風だの谷崎潤一郎だのを読んでいるの。けれども少し話し合つて見ると、やっぱり田舎の文

学通だけにどこか見当が違っているのね。たとえば「大菩薩峠」なんでも一代の傑作だと思っているのよ。そりやまだ好いにしても、評判の遊蕩児と来ているんでしよう。

そのために何でも父の話じや、禁治産か何かになりそうなんですって。だから両親もあたしの従兄には候補者の資格を認めていないの。ただ従兄の父親だけは——つまりあたしの叔父だわね。叔父だけは嫁に貰いたいのよ。それも表向きには云われないものだから、内々あたしへ当つて見るんでしよう。そのまた言い草が好いじやないの？『お前さんにも来て貰えりや、あいつの極道もやみそうだから』ですって。親つてみんなそう云うものか知ら？ それにしてもずいぶん利己主義者だわね。つまり叔父の考えにすりや、あたしは主婦と云うよりも、従兄の遊蕩をやめさせる道具に使われるだけなんですもの。ほんとうに悩れ返つてもものも云われないわ。

「こう云う結婚難の起るにつけても、しみじみあたしの考えることは日本の小説家の無力さ加減だわね。教育を受けた、向上した、そのために教養の乏しい男を夫に選ぶことは困難になった、——こう云う結婚難に遇っているのはきつとあたし一人ぎりじやないわ。日本中どこにもいるはずだわ。けれども日本の小説家は誰もこう云う結婚難に悩んでいる女性を書かないじやないの？ ましてこう云う結婚難を解決する道を教えないじやないの？

そりや結婚したくなければ、しないのに越したことはない訣だわね。それでも結婚しないとすれば、たといこの市まちにいるように莫迦ばか莫迦ばかしい非難は浴びないにしろ、自活だけは必要になつて来るでしょう。ところがあたしたちの受けているのは自活に縁えんのない教育じやないの？ あたしたちの習つた外国語じや家庭教師も勤つとまらないし、あたしたちの習つた編物あみものじや下宿代も満足に払われはしないわ。するとやっぱり軽蔑けいべつする男と結婚するほかはないことになるわね。あたしはこれがありふれたようでも、ずいぶん大きい悲劇だと思ふの。（實際またありふれているとすれば、それだけになおさら恐ろしいじゃないの？）名前は結婚つて云うけれども、ほんとうは売笑婦ばいしょうふに身を売ると少しも變つてはいないと思ふの。

「けれどもあなたはあたしと違つて、立派に自活して行かれるんでしよう。そのくらい羨ましいうらやしいことはありはしないわ。いいえ、実はあなたどころじゃないのよ。きのう母と買ひものに行つたら、あたしよりも若い女ひとが一人、邦文タイプライタアを叩たたいていたの。あの人さえあたしに比べれば、どのくらい合せだろうと思つたりしたわ。そうそう、あなたは何よりもセンチメンタリズムが嫌いだったわね。じゃもう詠歎えいたんはやめにして上げるわ。……

「それでも日本の小説家の無力さ加減だけは攻撃させて頂戴。あたしはこう云う結婚難を解決する道を求めながら、一度読んだ本を読み返して見たの。けれどもあたしたちの代弁者は諷のよう^{うそ}に一人もいないじゃないの？ 倉田百三、菊池寛、久米正雄、武者小路実篤、里見弴、佐藤春夫、吉田絃二郎、野上弥生、——一人残らず盲目なのよ。そう云う人たちはまだ好いとしても、芥川龍之介と来た日には大莫迦^{おおばか}だわ。あなたは『六の宮の姫君』^{ろくのみや}って短篇を読んではいらっしゃらなくて？（作者曰く、京伝三馬^{きょうでんさんば}の伝統に忠実ならんと欲するわたしはこの機会に広告を加えなければならぬ。『六の宮の姫君』は短篇集『春服』^{しゅんぷく}に収められている。発行書肆は東京春陽堂^{しゅんやうどう}である）作者はその短篇の中に意気地^{いきぢ}のないお姫様^{ひめさま}を罵っているの。まあ熱烈に意志しないものは罪人よりも卑しい^{いや}と云うらしいのね。だって自活に縁のない教育を受けたあたしたちほどのくらい熱烈に意志したにしろ、実行する手段はないんでしよう。お姫様もきっとそうだったと思うわ。それを得意そうに罵ったりするのは作者の不見識^{ふけんしき}を示すものじゃないの？ あたしはその短篇を読んだ時ほど、芥川龍之介を軽蔑^{けいべつ}したことはないわ。……」

この手紙を書いたどこかの女は一知半解^{いちはんかい}のセンチメンタリストである。こう云う述^じ

懐ゆつかいをしていているよりも、タイピストの学校へはいるためにかけお駈落ちを試みるに越したことはない。わたしは大莫迦おおぼかと云われた代りに、勿論もちろん彼女を軽蔑した。しかしまた何か同情に似た心もちを感じたのも事実である。彼女は不平を重ねながら、しまいにはやはり電燈会社の技師か何かと結婚するであろう。結婚した後はのちいつのまにか世間せけん並みの細君こじんに変わるであろう。浪花節なにわぶしにも耳を傾けるであろう。最勝寺さいしょうじの塔も忘れるであろう。豚ぶたのように子供を産みつづけ——わたしは机の抽斗ひきだしの奥へばたりとこの文放古ふみほごを抛りこんだ。そこにはわたし自身の夢も、古い何本かの手紙と一しよにそろそろもう色を黄ばませている。

……

(大正十三年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文放古

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>